

科目区分：中等教育コース（音楽教育専攻）

授業科目名：声楽基礎演習

## 初年次からの歌唱指導に対する意識づけ

音楽教育講座・木村 勢津

### I. 授業の概要

#### 1. 目的

初等教育ならびに中等教育の現場において、適切な歌唱指導を行うための声および歌唱に関する基本的な知識の修得ならびに基礎的歌唱技術の修得を目的とする。

#### 2. 到達目標

- (1)発声の原理を述べることができる。
- (2)楽曲にふさわしい表現方法について、自分なりの意見を持ち、論述することができる。
- (3)自分の声について、その特徴を知り、長所を伸ばし、短所を改善して、楽曲にふさわしい歌声で歌唱できる。

#### 3. 授業の位置づけ

本授業は、学校教育教員養成課程中等教育コース音楽教育専攻の1年生を対象として開講されている選択必修科目の授業である。

声楽領域のカリキュラムの位置づけとしては、将来教員となる学生の歌唱力と歌唱指導力の育成と大きく関わる基礎科目であり、2年次以降に開講される発展科目の「声楽(1)」～「声楽(4)」や応用科目の「声楽研究」の基盤となる科目である。

#### 4. 受講生の構成

受講登録者数は8名で、その内訳は下記のとおりである。

中等教育/音楽教育専修	1年3名(男1,女2)
初等教育/小学校コース	1年2名(女2)
同	2年2名(男女各1)

#### 5. 授業の内容

発声法、歌唱法に関する基礎理論の講義と歌唱実践の往還により、受講生自身が自己の声の特徴を知り、将来、歌唱指導を円滑に行うために、現在の発声や歌唱表現の問題点を認識し、改善方法を考究する基本的姿勢を養うことを目指した。主な授業の内容は以下の

おりである。

- (1)発声および歌唱に関する基本的な理論の講義
- (2)歌唱における自然な発声の定着を目指し、身体構造の理解とその使い方の演習
- (3)練習曲「Concone 50 lezioni Op.9」を用いた歌唱技法の取得のための演習
- (4)小・中学校の歌唱共通教材や日本語のテキストの楽曲による歌唱演習

### II. 授業研究と改善点

授業者は、平成28年度の教育学部改組に伴い、学校教育教員養成課程で実施していた声楽領域のカリキュラムの改変を行い、現在、授業内容の見直しと改善を進めている。

声楽領域の授業のうち、本報告書作成者が担当する1年生後学期以降の全ての授業に歌唱表現領域における教育課題に関連する内容を組み込み、受講生の歌唱指導に対する関心を継続的に高め、スキルアップへとつながる授業改善を試みている。

本授業における主たる授業改善は次に示す3点である。

- A. 教員志向に結びつく授業内容の見直し
- B. 理論と演習の往還
- C. 対話的授業展開

#### 1. 地域社会を核とした教育と研究のつながり（歌唱指導への興味関心を中心に）

本授業では、歌唱指導を行うためには、大学で何をどのように学ぶかの動機づけを自らが行えるよう、初年次から歌唱表現領域における教育の現状と課題についての情報提供を試みた。

#### i. 愛媛県内における歌唱指導実践経験から得た情報の提供

授業者は、平成19年度から愛媛県教育委員会の依頼を受けて愛媛県内の小・中学校において歌唱指導を行っている。過去10年間60余校で行った歌唱指導の経験から、県の

小・中学生の課題の動向を具体的に示し、また、課題解決に向けての練習方法と発声理論との関係を講じた。更に、受講生に演習を通じて自分自身の声の変容の過程を体験させることにより、適切な歌唱指導の重要性を認識させる授業改善を試みた。

## ii. 愛媛県の内教員から得た情報の提供

授業者が担当した教員免許状更新講習会において、愛媛県内の現職教員から寄せられた発声指導、歌唱指導に関する質問や悩みの中から、受講生の理解度や習熟度に照し合わせて、本授業で活用できる情報を選別し、提供することにより、教育実習で想定される課題への意識づけを試みた。情報提供にあたっては、児童・生徒に多く見られる発声上の課題、成長過程で見られる一般的現象のみを示した。

## 2. 理論と演習の往還

1年生前期に開講されている必修授業「声楽基礎」では、日本の伝統的な歌唱、合唱、西洋の発声による歌唱の3領域で15コマの授業を分担するため、西洋の発声に関しては、理論中心の授業展開となっている。本授業受講の条件に、この「声楽基礎」の単位取得が義務づけられており、前学期で学んだ理論を深め、受講生自身が歌唱演習を通じて、理論の正当性を体感できることに重きを置き授業を展開した。

自他何れの対象者であっても、上手く歌唱できない理由を分析できる力、歌唱改善のため方策を導き出す力の基本には、発声の原理を正しく理解しておくことが肝要であるとの考えにより、理論の説明後に演習を行ったり、演習後にどのような理論のもと演習を行ったかの説明することを心がけた。

## 3. 対話的授業展開

この度の学習指導要領の改定における音楽の対応課題のひとつに「対話的学び」が挙げられる。本授業では、身体訓練や歌唱表現演習において、ペアによる授業を展開した。さらに、共通歌唱教材を設定し、同じ楽曲であっても人により感じ方が異なること、異なる価値観を述べ合うことで新たな価値観を創出できる可能性があることを体験し、価値観の違いを認識して指導を行うことの重要性を感

得する授業の展開を心がけた。授業改善の主な工夫は次に示す3点である。

### a. ペアによる学習

身体の基礎訓練においては、基本的にペアによる学習を中核に据え、互いの問題点を指摘し、矯正し合う。また、矯正後の変容を言葉で説明し合う。

### b. 意見の共有

個人の演奏に対する各自の評価を発表させたり、紙媒体に起こして配布する。

受講票に記載された課題を用いての歌唱演習においては、事前に集約した課題の回答を紙媒体にまとめて配布したり、集約内容を授業者が口頭で発表したりすることで、他者の考えを把握したり、自分との違いを認識させる。

### c. イメージ共有による歌唱演習

楽曲に対して他者が抱いたイメージを全員が共有し歌唱することにより、自己の感性との違いを認識させる。

## III. 授業評価

本研究に対する授業評価は、毎回の課題と受講票への記述内容、DP対応学生認識調査の結果により行った。

### 1. 歌唱指導への興味関心

第15回の授業終了後の調査において、「本授業で学んだことで、教員として今後の活動に役立つことがあれば、学んだ内容と指導方法などの項目別に記す」との問いを設定し、自由記述により回答してもらった。回答者は受講生8名全員(1名は病欠のため後日提出)であった。

<役に立った>と認識する授業内容は、身体ほぐしに関する内容が最も多く、6名(75%)の受講生が挙げている。

教育現場から寄せられる最も多い歌唱指導の悩みが「声づくり」であった。授業者は、この解決策は、発声体である身体を効率よく使うための理論の理解と実践法の正しい修得であると考えている。そこで、全15回のうち13回の授業で、授業冒頭に歌唱のためのストレッチなどの短時間で実践できる身体の基礎訓練方法を実践例として提示し、受講生に実体験させた。<役に立った>との回答は、この授業内容への反応である。

歌唱指導方法についての反応は、アドバイスの言葉がけに関するものが多く、6名(75%)の受講生が挙げている。「良い所をみつけて褒める」「禁止事項をなるべくつくりたくない」「具体的イメージができる言葉を用いた指導」などの記載が複数の学生に認められた。

講義全体を通じての感想は、自分自身の声の変化に対する印象を強く抱く受講生が多く8名中7名(88%)であった。

各回の授業では、歌唱指導に関する関心が高い値を示していたが、授業全体では、自分自身の声や歌唱の変化、他の受講生の変化への興味関心が強い傾向が認められた。

## 2. 理論と演習の往還

実技系の演習においては、受講生が声の変化や技術の修得を実感できることが、学習意欲の向上につながると考えている。受講生個々の発声や歌唱に関する問題点を認識させ、問題が生じている原因、改善のための方策を的確に示すこと、平行して行う演習により改善されたことを体感させることが重要であり、この往還により、受講生の知識と技術のスキルアップが図られる。

第3回の授業後のコメントを挙げて、受講生の授業評価とする。(以下、コメントは原文通りの表記とする。斜字は筆者の分析)

○母音である程度歌えても、歌詞が入ると全然歌えなくなるという課題がありました。その課題の解決の糸口は、今日の授業にありました。まず、母音の歌い方が完全に間違っていました。だから、まず母音の歌い方を丁寧にやっていかなければならないと痛感しました。(問題認識と解決方法の理解)

○前回の目線に関するご指導を思い出しながら発声すると、声色や音量が自分でも驚くほど変わり、非常に嬉しく、もっと研究していきたいと感じた。他の方も骨盤に関する指導が目立っており、様々な動きを加えながらの個別指導で皆2回の授業で随分声が変わり、その変わり様に非常に驚いている。(変容の認識と改善策への気づき)

○できるだけ首やあごのあたりを緊張させないように意識することに気を取られすぎました。恥骨への意識が大切であることがわかりました。改善するためには、第一段階として2つの意識をバランスよく改善できる

ようにしたいと思います。(問題の認識と解決方法の模索)

○母音の発声は普段話しているときとは異なる。歌語で発音するというのを学ぶことができた。また、高い音はその音よりも前から準備しておくことで、無理なく音が出せることが体感できた。恥骨や骨盤など、常に正しい姿勢を意識して歌えるようにしたい。(解決方法と変容の認識)

自分の課題について、ほとんどの受講生は、ある程度認識できていた。他者の歌声の変化にも着目することができている。自己の歌唱が改善された時の喜びを感じた受講生は多いが、自覚できない受講生も存在した。

次に示すコメントはその一例である。

●アドバイスを受けてわかりやすかった部分と自分で実感しにくい部分がありました。周りの人は違いがわかっていたみですが、自分でもつかめるような練習法をみつけてみたいと思います。

DP対応学生認識調査では、課題の授業外学習が平均2.43hに対して、自発的学習時間の平均は1.43hを示しており、課題にはある程度対応できているが、自ら発展的な学習へとつなげることができる学生の育成には至っていない。今後の課題である。

## 3. 対話的授業展開

15回の授業のうち、初回と最終回を除くすべての授業において、前述のa.~c.のいずれかの方法を用いて授業を展開した。ここでは第13、14回に受講票に記述された内容により評価を行う。

### 演習内容

第13回・・・中学校歌唱共通教材「夏の思い出」を、特定の受講生が描いたイメージを共有し全員で歌唱する。

### 学生のコメント

【イメージを提供した学生のコメント】

□他の人もおなじイメージで歌っていると思うと少しどきどきした。絵が浮かんできても歌いやすかった。ほかの人のイメージも聞(聴)いてみたいと思った。

【他者のイメージで歌唱した学生のコメント】

○他者の持ったイメージはこんな感じなのか

など想像しながら歌うことで、歌詞を丁寧に扱うことができたと思います。

○想像力が乏しいため、自分で想像してもしっくりするところがあまりない。なので、誰かのイメージを聞くことはとても勉強になる。

○たくさん咲いていることをイメージするのが新鮮であり、前歌ったことがうたったときと違っていたので、少し違和感すらも感じました。しかし、他者のイメージを聞いて、納得した部分や、そうしたいという部分があったので、とりいれていきたいです。

○自分のイメージで歌うときよりも、より丁寧にイメージを表現しようと意識して歌うことができたように感じた。

○より鮮明なイメージを提示していたので、嬉しさを自分のイメージよりも少し表現の工夫が必要だった。

○戦争が起こっている中でも、たくさん水芭蕉の花が咲き誇って風景を思い浮かべて歌うというのは、私の中のイメージにはなかったもので、自分のもつイメージの参考にもなり、それをうまく表そうとするのはたくさんすることを考える必要があると感じた。

#### 演習内容

第14回・・・前回の楽曲を別の学生のイメージで歌唱した。受講票には別のイメージで歌唱したことに関する設問を設定していない。しかし、当日の受講者7名のうち、6名がイメージに関する歌唱への感想を記述していた。

#### 学生のコメント

◇自分の想像を伝えるためには伝わるような具体的な方法とそれができる実力がなくできない。(知識と技巧への関心)

◇歌唱する時には、子ども達のイメージを大切にしたいと思った。もちろん、一人ひとりのイメージを全て反映することはできないと思いますが、他者がもつイメージとの共通点を探することで歌う時の色々な工夫を楽しむことができると思います。

◇自分のイメージで歌うときも、他者のイメージで歌うときもぼんやりとした考えで歌っていましたが、強弱や音色、リズムなど、それぞれのポイントで考えるとどのように歌うのがいいかと一つ一つ考えて、具体的なイメージを持って歌うことができるように、練習していこうと思った。

◇自分のイメージとの相違点や共通点を見つけながら歌うことは、とても面白く、自分が教師になった時、色々な生徒のイメージを聞き、反映できる指導をしたいと思った。(指導への興味関心)

本授業では「対話的学び」の実践を試みたが、2回の授業に対するコメントから、受講生自身が他者の価値観や感性で表現してみるものの体験を通して、歌唱指導との関連を感じ得するという目標はある程度達成できたと捉えられる。

### 3. DPとの関わり

本授業は、専門科目として基礎的位置づけにあり、主にDP1とDP4への対応している。DP対応学生認識調査の結果は以下のとおりである。なお、第15回目の授業終了時に、回答を求めたため、当日欠席していた1名の回答は反映されていない。

#### (DP1 知識・理解)

1とてもそう思う.5	4DPと無関係.1
2ある程度そう思う.1	

#### (DP4: 関心・意欲・態度)

1とてもそう思う.2	2ある程度そう思う.4	4DPと無関係.1
------------	-------------	-----------

7名中6名の受講生は各DPにある程度対応した授業であると評価しているが、DP1とDP4とも無関係と回答した受講生が1名いる。しかし、受講票の記載内容や課題の提出内容から回答を間違った可能性がある。

### IV. 今後の課題

昨年度と同科目の最終アンケートで、カリキュラム上、中等教育コース・音楽専攻の学生に提供されている科目であり、特に歌唱技術の修得に関して、内容の充実を求める要望があった。今年度の受講生も小学校コースの学生が中等教育コースの学生を上回り、基礎知識の習熟度に差異が認められ、理論と演習の往還において、基礎理論の説明に時間を要する場面が見

られた。複数免許の取得を推奨する観点からも授業内容の精査が求められている。

授業方法についての印象において、言葉がを挙げている受講生が多く見られたが、理論的見地から歌唱指導にアプローチし、どのような改善を行わせるための言葉がけであるかが重要な観点である。心理的効果を求める言葉がけに加えて、肉体的改善がなされる言葉がけの重要性に気づく指導方法の改善が課題である。

さらに、13回の授業を通して実施した身体訓練に関する演習について、授業内容が多く、思い出せるのが一部だけあり、今後の授業で反復して欲しいとの要望があった。歌唱指導で活用できるためには、指導者自身が正しく実践できることが重要であり、内容を精査し、学年進行、学生の習熟度に合わせた情報提供を今後さらに検討すべきであると痛感した。

DP 対応学生認識調査において、自発的読書の時間が著しく低いこと(0.14本)、自発的活動が認められないことも今後の課題であり、理論への理解の充実のためにも一層の工夫が望まれる。Moodle等の危機の活用も含め、今後の課題としたい。